

兵庫県関宮町葛畑の庚申信仰

窪 徳 忠

1. はじめに

私は、昨1991年3月、高野山大学の日野西真定教授を通じて、兵庫県養父郡関宮町の教育委員会から、同町葛畑の庚申信仰の調査を依頼された。ここ約30年ほど、庚申信仰関係の調査や研究から遠ざかっている私としては、大変戸惑ったが、2、3回の意見交換のうち、同月26・27の両日にわたって日野西教授の案内で現地を訪れた。村人たちの話をきくと、信仰は熱心であり、修験道との関係を窺わせる資料もある上に、江戸時代以来の伝統をも感じさせる伝承さえ残っている印象をうけたので、ふかい関心をもった。けれどもその時は庚申日ではなかったので、いわゆる庚申待の実際をみることはできなかった。そこで、いつの日かその実際の様子をみようと思いつながらも都合がつかず、徒らに時を過ごすだけであった。たまたま、今92年4月、幸いにしてその好機に恵まれ、漸くその実際の姿に接することができた。ただ、まだ私自身としては、些か不十分、不満足な点がないではないが、ここにその概略を紹介し、更にくわしい点については、他日を期すことにしたい。

なお、読者諸賢のなかには、あるいは庚申信仰とか、庚申待などについては、よくご存じない方々もあるやもしれず、また誤解しておられる場合すらないではないように思われるので、本論に入る前に、一応その概略を説明しておくことにする。

ところで、関宮町は兵庫県の北部、豊岡市の西南方にあたり、兵庫県の最高峰氷ノ山（1510メートル）に源を発して、西から東に流れる八木川に沿う谷間の町である。町域は96.6平方キロに及ぶが、その87%までが山林や原野で、耕地は八木川沿岸と山や高原のおだやかな傾斜地とに限られている。1956年に、関宮村と熊次村とを併せて成立したので、町内の大字の数は18に及んでいる。東西は18キロ、南北は7キロという形をしている。人口は、1985年現在5377人というが、鉄道は山陰本線八鹿駅で下車して、車で八木川に沿ってかなり西に行かなければならないので、交通はかなり不便である。けれども、付近にはスキー場がかなり多く、冬は約30万人のスキー客が訪れるという。

葛畑は、旧熊次村の1大字で、鉢伏山の東南の山麓の谷間にある集落だが、律令制時代の山陰道に沿っていて、古くからあったと伝えられている。北には葛畑スキー場があり、私が泊った宿も、冬はスキー客で一杯になるとの話であった。そのスキー場からは、縄文時代や平安時代の土器が出土しているという話だから、古くからあつた集落であることは誤りないであろう。

16世紀中葉に創建され、1869年に荒御霊神社——祭神はスサノオノミコト——と改められた神社の境内には、村歌舞伎の舞台があり、国指定の重要有形民俗文化財となっている。その隣りには、以前、10世紀前半の開基で真言宗高野山仏心院末の般若院福正寺があった。いわゆる天正の乱（16世紀後半）で兵火にかかり、のち小庵が建立されたが、附近の諸寺が廃寺になった折、廃寺を恐れて修験寺となった。その境内に庚申堂があり、1895年に般若院は廃されたけれども、庚申堂だけは今に現存している。この庚申堂が、葛畑の庚申信仰の中心であり、私の調査したところである。ちなみに、関宮町近辺にはかなり修験関係の寺院が多いようである。

2. 三尸説と庚申信仰

従来、日本の庚申信仰の源流については二つの説があった。江戸時代以来、明治・大正のころまでは、中国からの伝來說が圧倒的であった。ところが、20世紀の前半、大体1930年代以降、庚申信仰や庚申待を日本固有とみる新説が抬頭し始めた。柳田国男を中心とする、一部の日本民俗学者たちによる主張である。とくに柳田国男は、「庚申の由来に就いては『拾芥抄』以来、支那から輸入した学説が弘く行はれ、学問をした者だけは之を信じて居た」（『農村信仰誌』序）とか、「我邦の庚申信仰は、大陸から輸入せられたものでなく、むしろ外部の影響によって変化したこの邦固有のものと見られる」（「猿の祭」、「津軽民俗」第1号所収）などとのべているが、かれの見方や態度をもっとも明確に示めているのは、「二十三夜塔」（「本流」創刊号所収）のなかの、つぎのような一節である。いささか長文ながら、引用してみよう。

庚申の信仰は支那から来たものだ、学者だけは昔からさう言っているが、双方の形は色々の点でちがって居て、同じなのは名前ばかりと言ってもよいやうに思はれる。さうして又仏教とも思へない、こちらだけの特長も有るのである。（中略）中華民國も庚申の夜を守るといふ風習だけはあつたが、それはただ警戒の夜といふまでであった。睡れば三尸といふ虫が人間の身から抜け出して、天に昇って隠し事を密告するなども謂って居たが、我邦ではさういふ後暗いことは言はなかった。（中略）其日がただ十千十二支の六十の組合せの一つだからと言って、この信仰までも隣国から、教へてもらったやうに思ったのは、誤りである。（下略）

とのべて、それまでの「学者」の説を頭から否定する立場を鮮明にしている。柳田を師とし、その説を祖述する日本民俗学者たちは、専らその説に追従した。しかも当時は、かれら以外に庚申信仰や庚申待を調査研究する人たちはほとんどいなかったために、爾来庚申信仰を日本固有とする見方がいわば学界の定説化して、1952年に中国伝來說を唱えた私は、四面楚歌というか、木っ端微塵に撃破されてしまった。その主な論拠は、私が日本各地の庚申信仰の実体をみていないという点におかれていたので、1954年から各地の実態調査を始めて、北は青森県から南は鹿児島県まで、約900集落を調べたところ、わずかに約40集落には過ぎなかったけれども、中国で説く三尸説と共通する伝承や習俗、信仰などを見つけることができた。そこで、かれら日本民俗学者たちが古代日本の文化を反映していると主張している沖縄県下のそれを見るべく、1966年に初めて同地方を訪れた。ところが、県下にはかれらが「日本固有」と強調する庚申信仰は、影も形もまったく認められなかった。従って、かれらの主張する庚申信仰の日本固有説は雲散霧消してしまったわけである。そうして、柳田国男が世を去ってからかなりの時代がたった今日では、日本固有説に固執する日本民俗学者や郷土史家たちは、皆無にちかい有様となっている⁽¹⁾。

ところで、現在の日本の宗教研究者のあいだでは、中国の三尸説を正確に把握している方々は、大へん失礼ないい方ではあるが、意外に少ないように思われる。そこで、まず中国の三尸説の説明から始めようと思う。

317年に、葛洪によって纏められ、一般に神仙思想を集大成したといわれている『抱朴子』内篇巻6の微旨篇には、『易内戒』、『赤松子経』、『河圖記命符』などの緯書類に属すと思われる書を引いて、人間の体内には三尸というものがいる。三尸は形はないけれども、実は魂霊鬼神のたぐいであり、しかも人間を早死させようとしている。それは、人が死ねば三尸は鬼（亡霊）となって、勝手に四方を遊び歩き、人々から祀りをうけることができるためである。そのために、庚申日がくるたびごとに人間の体内から抜けだして天に上り、その人間の行った過失を司命の神に告げるという意味のことが記されている⁽²⁾。緯書類は、なかには1世紀に撰述されたものもあるけれども、多くは2世紀ごろに作られているから、私はいまのところ、中国の三尸説はおそらく1世紀中葉以後か2世紀初頭のころから、緯書類をまとめた方士たちによって唱えだされたのではないかと推測している。

三尸説は、『抱朴子』の説が道教の教説に取入られるとともに道教に取入れられ、庚申の日に徹夜をして三尸が体内から抜けだして上天するのを防ぐ守庚申を始め、服薬、服気、祈禳、呪い、辟穀、おふだの使用など、さまざまな三尸を駆除する方法が考えだされる一方、しだいに道士以外の文人や一般の人々のあいだにも拡がりだした。唐の段成式の著わした有名な文集ともいえる『酉陽雜俎』巻2玉格篇に三尸説のごく概略が記され⁽⁴⁾、同じく唐代の著名な文人で、古文の復興につとめた柳宗元が、わざわざ「罵尸虫文」をつくっ

たのは、そのよい反映であろう。⁽⁵⁾

その影響は仏教にも及んで、仏教の僧侶やその信仰者たちのあいだでも守庚申すなわち庚申の日の夜明かしをやり始めた。おそらく、9世紀中葉ごろからのようだが、明確な時期はわからない。僧贊寧の著わした『大宋僧史略』巻下、「結社法集」の項に「近ごろ、周や鄭の地方の村では、多く守庚申会を組織している」と記されているのは、その明証である。さらに下って南宋後期の呉自牧が、当時の都臨安の地理や風俗を述べた『夢梁錄』巻19の「社会」の条には、役人や金持の夫人や娘たちのうちで仏教を信ずる人たちが集って庚申会を組織し、『円覚経』を読誦したが、その会合にでるときには珍宝や珠翠の首飾りをしたので、闘宝会とよばれたとみえているから、仏教の場合は道教とは違ってかなり華美だったように思われる。

そのうち、道仏2教のやり方は混淆し、清代の作と思われる『庚申宝卷』によると、清代の庚申会は観音信仰との結びつきがつよく、目的は福祿寿や招財、消災などの現世利益で、道教的色彩は、わずかに玉皇にその名残りを止めているにすぎない。今度の太平洋戦争中⁽⁶⁾でも、杭州附近では老婆たちが集って念仏を誦えつつ守庚申を行なっていたと伝えられているが、1988年中国にいったとき、陝西省華山の麓の玉泉院で、道士たちが個人で守庚申をやっていると聞かされた。従って、道教的守庚申が現在なお行われていることは、事実である。そして、道教では5世紀以来今日まで、庚申日の斎戒、五辛・葷膾の禁や静粛にすることなどが、きびしく説かれていた。

一方、日本では、慈覚大師円仁の『入唐求法巡礼行記』の承和5年(838)11月26日の條の「夜人咸不睡。与本国正月庚申之夜同也」という一句が、守庚申を行なっていた由を窺わせる最古の文献記録である。私はこの一句に基き、日本における守庚申すなわち庚申の日の徹夜は、9世紀初頭ごろから始まったのではないかと臆測している。ただ、9世紀の後半からは宮中でも天皇を中心に行れるようになった。すなわち、まず天皇が出御されると、参列者一同に酒饌を賜り、ついで菓子、干物、酒などがでて、終夜碁や詩歌などをして遊び、夜明け近くになると侍臣が管絃を奏し、夜明けに下賜品を頂いて退下するという順であった。だから、いわば中国宋代の仏教のやり方に近い形式といっても差支えない。ただ、かりに僧侶が陪席しても、宗教色は皆無であった。公卿や女房たちも、それぞれ自分たちだけで、ほぼ、同様の形式で守庚申をしていた。大江匡衡の詩集『江吏部集』などによると、かれらは三尸説を知悉し、その教えや目的に従って徹夜をしていた由が誠に明白である。⁽⁷⁾特に三尸説との関係から注目すべき点である。

このような形式の守庚申は、1、2の例外的な場合を除いて、15世紀中葉まで続いた。ただ、遊びの内容は、音曲、謠、雑談、貝合せその他、時代によって変化があるが、いわば睡気覚しの手段だったから、極言すれば何でもよかったのである。1、2の例外的場合

とは、11世紀後半に源俊房が「先聖」即ち「孔子」の御影をかけて奠ったこと、藤原頼長が「老子」の御影をかけ、その前で『老子道德経』の講読や討論をやったのち、『老子守庚申経』に基づく宗教儀礼を行ない、鶏鳴後に寝たことである。⁽⁹⁾前者は孔子と老子とを間違えた結果だろうが、後者は頼長が中国関係の知識にたけていた一証となろう。『老子守庚申経』とは、正しくは『老子守庚申求長生経』といい、後述の『庚申縁起』の基ともなった、中国道教の三尸説関係の諸書の抜き書である。抜き書をしたのは中国の道教関係者であろうが、日本に舶載したのは渡唐の日本人僧であったであろう。

下って15世紀中葉、日本の庚申信仰は仏教と結びついた。文明3年(1471)造立の現存最古の庚申板碑(川口市領家の実相寺)を始めとする庚申板碑や以後続いて造立されて今日に及んでいる庚申塔は、その例証である。⁽¹⁰⁾また、いわゆる庚申待の意義ややり方、功德などを仏教的に説明し、庚申講や庚申待の所依の經典となったのが『庚申縁起』である。

『庚申縁起』は、おそらく『老子守庚申求長生経』に基いてつくられたように考えられるが、現存最古の『庚申縁起』は、宇佐八幡宮所蔵の「永弘家文書」のなかに収められている『庚申因縁記』である。『庚申因縁記』がつくられたのは、その冒頭の一句から推して15世紀末のことと判断される。⁽¹¹⁾従って、15世紀は日本の庚申信仰史上注目すべき時期である。なお、庚申の夜の集いを庚申講、申侍などとよび始めたのも、同じく15世紀のことである。⁽¹²⁾

けれども、最も華やかだったのは江戸時代であった。いわゆる庚申待はしだいに一般の人々のあいだにまで普及し、『庚申縁起』類の記述によって釈迦や青面金剛などを本尊とし、修験道や神道もそれぞれ独自のやり方を主張し始めた。山崎闇斎は、垂加流神道を説く一方、日本の庚申信仰は猿田彦大神を本尊とすべきことを強調した。さらに、富士講のような信仰集団までも「庚申」をのべたてた。その結果、天皇、公卿、大名から町人、農民、漁民まで、いわばあらゆる階層の人々が「庚申さま」を祀るようになり、青森県から鹿児島県まで庚申講が組織される状態になった。⁽¹³⁾そのため、各地に庚申堂が建立され、「庚申さま」の絵像が売出され、『庚申縁起』類も転々筆写されて、各地に普及した。3年間連続庚申待をやった場合には、最後の18回目に盛大な供養を行ない、庚申板碑の後身である庚申塔と通称される石造の供養塔を造立する習俗も起った。尤も、地方によっては、木製の角塔婆で代用した。

17世紀初期には、徹夜が辛いために、鶏が鳴くまで起きていればよいとの説が説かれたして普及し、七色菓子という特定の供物も考えだされた。供物は、各地によって特別なものが説かれるようになっているが、くわしくは省略する。「庚申さん」のご利益も、地方により、信仰者の職業によって、さまざまにいわれだした。私が自身で調査した結果を大雑把にまとめれば、農民は豊作、漁民は海上安全や大漁、商人は商売繁昌だが、全国共通な

ご利益は治病であった。勤行のやり方も、人により、地方により、さらには宗教宗派によって異なるけれども、一応制度化され、仏教や修験道関係では、「庚申の真言」といわれている「オン、デイバヤキシヤ、カカカカカ、ソワカ」、「オン、コウシンライ、コウシンライ、マイタリ、マイタリ、ソワカ——これは、オコウシンデ、コウシンデ、マイトリ、マイトリ、ソワカと俗唱されている——」が全国的に普及している。見ざる、いわざる、聞かざるの三猿を、「庚申さんのお使い」といい出したのも、江戸初期からのことだが、おそらく「申」字関係からの思いつきであろう。

江戸時代以前から、庚申の夜の男女の同衾と五辛・肉食の禁が説かれ、庚申の晩にヤドッタ子は盗人になるといわれていた。江戸時代中期からは、その具体例として石川五右衛門があげられ、並木宗輔は浄瑠璃「釜淵双級巴（かまがふち、ふたつどもえ）」を作っているが、のちには庚申日生まれも盗人になるといわれだした。そこで、その日生まれの子には金属に関係のある名をつけたが、初めから金をもたせておけば盗人にはならないだろうというわけである。夏目漱石が金之助という名なのは、庚申日生まれのためである。⁽¹⁴⁾ また、当日の夜業、婦人の鉄漿つけ、結髪、洗濯も忌まれたが、室町末以来の伝統をついで、縁談、婚姻も同様だった。庚申の「申」字の音が「去」字に通ずるとしたためであった。七という数を重視し、七庚申その他を重視したのも江戸時代からであった。関東一円から福島県方面では、庚申の夜の火事や地震を忌んだが、埼玉県の一部で若者たちが講のヤドを揺つたところ、講中が地震と思い、翌晩講をやり直したので、面白がって毎夜続けたら5日目で露見し、講中から大目玉を喰ったという愉快な話もある。⁽¹⁵⁾ また、関東から新潟県にかけての地方には、一地区に多数の庚申塔を造立する習俗が、江戸末期から明治初期にかけてみられた。⁽¹⁶⁾ とにかく、江戸時代は日本の庚申信仰史上最も多彩な時代であった。

文明開化を謳歌した明治期に入ると、初期におこった廃仏毀釈の影響をうけて、上記のような盛況さは大きな打撃をうけた。けれども、なぜか間もなく盛り返えし、一時中断した庚申講が各地で復活した上に、新しく組織された場合も少なくない。ただ、太平洋戦争の結果はすっかり衰え、各地で庚申堂の祀りや講組織が中断してしまった。今日では、わずかに大阪の四天寺の庚申堂、東京柴又の帝釈天その他の祭りなどにその名残が見いだされるにすぎない状態となっている。

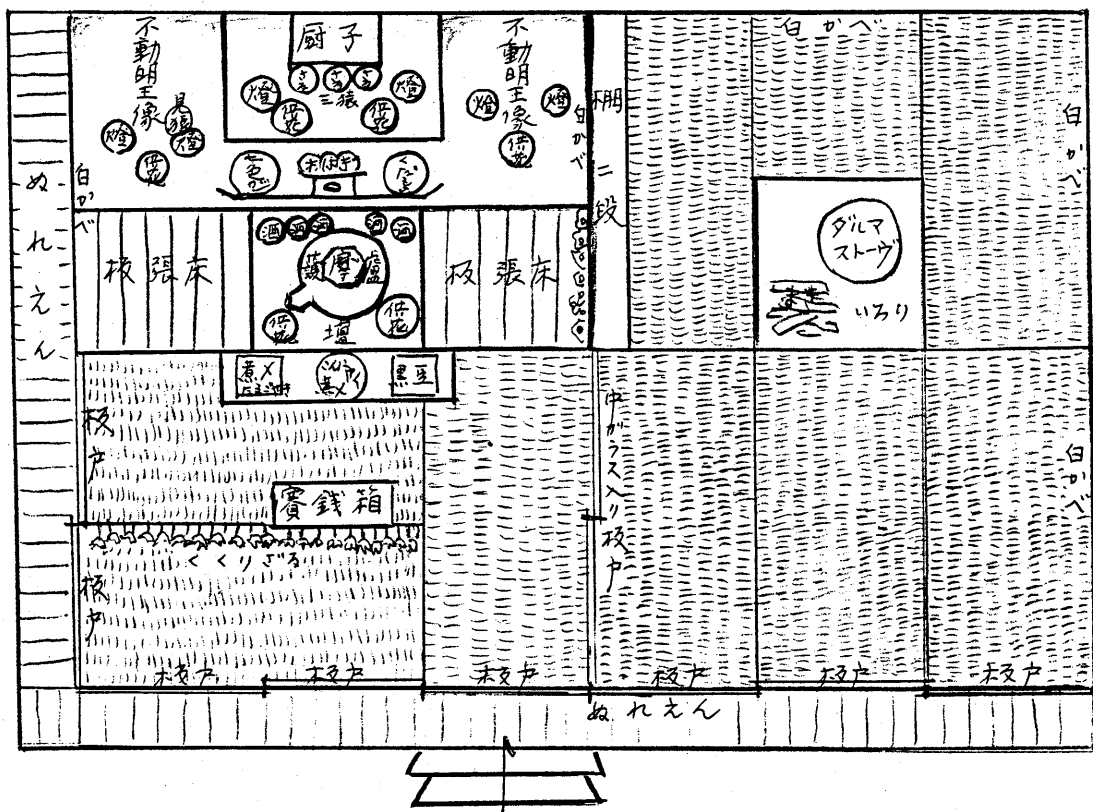
3. 葛畑の庚申信仰

前置きがすっかり長くなってしまったが、これから本論に入ろう。ただ、同地の文化財保護委員西村修が1988年にまとめた「葛畑の庚申調査報告書」に概略がのべられているので、ここでは努めて重複をさけ、その「報告書」で言及されていない、もしくは不十分な点を中心に紹介したいと思う。⁽¹⁷⁾

3-1 庚申堂など

「報告書」によると、葛畑の庚申堂は、般若院福正寺と称する修験道関係の祈禱寺の所屬として、建立されたという。創建の時期は明確さを欠く。けれども現在所蔵されている蛙股に記されている「享保四年（1719）三月 建立（中略） 願主般若院」という一句によって、「報告書」はあっさりとそのときを創建と考えている。しかし私には、そう簡単には思われない。というのは、般若院が廃寺になることを恐れて修験寺に転向した元和4年（1618）より以前から、宮中はもちろん、公卿たちのあいだでしきりに庚申待が行われ、真言宗の東寺なども壇家の公卿たちの許へ壇供やおふだなどを届けていた⁽¹⁸⁾。従って、京都から離れていた地方の葛畑とはいえ、真言宗の系統をひく般若院の住職が庚申信仰を知らない筈は、まずあるまい。しかも、すでにその当時修験道においても庚申信仰を鼓吹し始めていた。以上のようなことを踏まえて私は、般若院が修験寺に転向した当初から、庚申堂を同時に建立したのではなかと臆測する。

第一図



もし、「報告書」のように、「享保四年」に創建したとすれば、般若寺の修験寺に転向した時期より約100年の隔りがあり、かなり遅すぎるように思われる。当時は前述のようにすでに各地に庚申信仰が普及していたところである上に、創建とすれば棟札にその紀年を記すべきであり、蛙股などに記すとは思われない。従って私は、蛙股に記されている紀年は、あるいは重修の際に何人かがいささか戯れの気持をも交えて記したのかもしれないと臆測している。

庚申堂の向って右側には、庚申待の折に村人たちが籠る籠り堂が、付属して建てられている。籠り堂も、庚申堂同様、間口一間半、奥行2間で、中央に囲炉裏が造られている。現在の建物は、「報告書」によれば、大正9年(1920)の改造だという。けれども、その創建時期も不明であり、「報告書」には一言もふれていない。しかし、般若院が修験寺に転向してから約60年をへた延宝8年(1680)には、60年目に1度廻ってくる庚申年だということで、各地の庚申堂ではさかんな祭祀が行われ、庚申塔も数多く造立されている上に、庚申待がしきりに催されていた。なかには鶏が鳴くのを待ってねた人々もいたようであるが、徹夜が原則されていたから、多くの庚申講の講中たちは、庚申堂付属の籠り堂か頭屋の家で徹夜をしていたに相違ない。とすれば、おそらく葛畑の籠り堂も、当時の一般の風潮や習俗に倣って、庚申堂と同時に建立されたとみてほぼ誤りないのではなかろうか。そして、葛畑の人たちも、庚申堂に参って勤行をしたのち、夜明けまでこの籠り堂に籠って、さまざまな話をしながら起きていたように推測される。なお、私の知る限りでのことだが、現在各地の籠り堂は、庚申堂ともどもかなり荒れている場合が少なくない。それに対して葛畑では、庚申堂も籠り堂も手入れが行届いている。村人たちの熱心な信仰心が十分に窺われる。

庚申堂には、修験道関係の43枚のおふだの版木類、占具、その他が所蔵されているが、多くは青面金剛、すなわち庚申関係以外のものである。けれども、以前般若院が修験寺として行なっていた祈禱や呪いその他を実証する資料として貴重な意味があるから、大切に保存されることが望ましい。版木のなかには、「牛王宝印」と記したものがある。これは、後述の本尊青面金剛が頭上に頂く日輪のなかに、三足の鳥の画かれていることと合せて、私が般若院の属していたのは、熊野系統の修験道ではなかったかと考える根拠の大きなひとつである。というのは、「牛王宝印」は、熊野から始まったためである。

多くの版木類にまぎって、「げに祈る、心わかのえよひの空、うんはてんより授け賜うぞ」と記した板が堂に所蔵され、裏には「福正寺般若院 願主 当村弥五郎」とみえる。「報告書」には、これによって、「かつて昔、村人が庚申待に歌をつくって楽しんだことなどがうかがえる」と記されているが、実はこれは、江戸時代に全国的に広く拡まっていた庚申さんの御詠歌で、「報告書」の編者西村修が苦心して蒐集した同県但東町石坪広一旧

蔵の「庚申の由来略縁起」と酷似する内容の、京都府峯山町延命院現蔵の「庚申青面金剛縁起」の末尾にも記されているものである。⁽¹⁹⁾従って、以前般若院の存在していたころ、村人たちが庚申堂で庚申待をやった折に誦えたか、あるいは願主弥五郎がある祈願の目的でいつの頃か庚申堂に奉納したかのいずれかであって、庚申待の際に村人たちが歌をつくって楽しんだことを示めす証拠には到底なりえないのである。ただ、村人たちがこの御詠歌を知っていたことを示唆する証拠となるのは明らかである。

庚申堂の入口から少し入った正面の場所におかれた賽銭箱の上に、天井から吊られた横棒があるが、そこには数多くのくくり猿が下げられている。色もさまざまで、大きさも不定である。これは、安産を祈るための供物だという。くくり猿を供えるところは全国的に⁽²⁰⁾いっても甚だ多いが、安産祈願とは珍しい。また、堂の右手、籠り堂との境の板壁にそって、真中に穴をあけた直径約10センチ程度の平たい小石が、穴に通した紐で上から多数吊り下げられている。これは、耳が聞えるようにとの祈願で、自分で川から拾ってきて穴をあけて供える由である。同様に耳の聞えることを願うのは、東京の一部や福島県、岐阜県などでもみられるが、東京の練馬区北町3丁目では柄杓の底をぬいて庚申塔に供え、徳島市・小松島市小松島町・貞光町端山では錐を供えたり、穴のあいた石を庚申塔に下げるの⁽²¹⁾であって、庚申堂内に供えるのは葛畑しか知らない。このような石を、徳島県貞光町端山字広谷の庚申講では「耳とおし石」とよび、耳病が治る一方、勉強がよく出来るようになる⁽²²⁾といっている。

3-Ⅱ 本尊と諸仏

葛畑の庚申堂の本尊は、前述のように、江戸初期からしだいに庚申信仰の崇拝対象とされだした青面金剛だが、庚申日の唯一の崇拝対象とのべているのは1675年（延宝3）刊の『芦分船』が最初である。けれども、他の諸仏より一段高い正本尊視されだしたのは17世紀中葉すぎからと思われる。従って、葛畑の青面金剛は、庚申堂の創建と同時に奉安されたに相違ない。ある村人は、この青面金剛像は儀軌に忠実に従っていると告げたが、実は必ずしもそうではない。元来、青面金剛像に儀軌はなく、『陀羅尼集経』巻9所掲の「大青面金剛呪法」にみえている下記の一段を「儀軌」と称しているのである。そこで、参考までにその原文を掲げておく。

一身四手。左辺上手把三股叉。下手把棒。右辺上手掌拓一輪。下手把羂索、其身青色。而大張口。狗牙上出、眼赤如血而有三眼。頂戴髑髏。頭髮聳堅如火焰色。頂纏大蛇。両膊各有倒垂一龍。龍頭相向。其像腰纏二大赤蛇。両脚腕上亦纏大赤蛇。両膊各倒垂一龍。龍頭相向。腰纏大赤蛇。所把棒上亦纏大蛇。虎皮縵膊。髑髏嬰珞。像両脚下各安一鬼。其像左右両辺各当作一青衣童子。髮髻兩角。手執香鉢。其像右辺作二葉叉。一赤一黃。執刀執索。其像左辺作二葉叉。一白一黒。執稍執叉。形状並皆甚可怖畏。

手足並作薬叉手足。其爪長利。⁽²¹⁾ 預 預 消 硝

ところが、これまでに私が各地でみたところでは、上記の説に沿っている青面金剛像はほとんどなく、多くは一面六臂で、身体に纏わりついている蛇もそれほど多くはなかった。葛畑のそれは、まず光背が宝輪を象っているように見え、光背とは思われない。頭髮も「聳豎」とはいえず、火焰色とはみえない。身体も青色ではなく、大赤蛇や龍もまわりついてはいない。その上、頭髮上には、前にふれたように三足の鳥をなかに画いた日輪を頂いているが、このような形は私としては初見であった。手の数は六臂で、向って左の第1手は棒状のもの（実体不明）、第2手は矢、第3手は鈴をもつが、これまた初見である。向って右の第1手は宝輪、第2手は弓、第3手は上半身裸体で両膝をまげた女性の頭髮を把んで下げている。口からは狗牙はでていず、腰に蛇はいない。虎皮はまとうものの、虎頭がなく、脚下の鬼は唯一鬼である（第二図）。このような作風からみて、江戸初期の作にするのはいささか困難である。左右に立つ四薬叉の色や持物も『陀羅尼集経』に記すところとは異なっているが、その原文は煩をさけて省略する。 擘 擘 背 背

『陀羅尼集経』では、侍童は本尊の左右に侍立するように記されているが、葛畑では雌雄の二鶏とともに厨子の両扉の裏面に彫られている。一見奇異に感ぜられるが、開扉すると釣合いがよくとれていて、落ち着いた形になる。おそらく、その効果を考慮した結果であろうが、全国的にいて類例を知らない。

第二図



三猿は厨子前に安置され、いわゆる見猿のみが大きくて高さ18センチ、他の二猿は15センチなので、不揃いを感じをうける。なお、本尊は高さ50センチ、厨子の高さは1メートルである。

本尊を納めた厨子の左右には不動明王が各1体宛安置されている。『報告書』には1体しか記載されておらず、しかも護摩供養の際などに本尊の前立ちとして祀られていたのだろうと記されているが、不動明王を青面金剛の前立ちとするのは、いささか合点がいかない。おそらく、修験道ときわめて密接な関係にある仏だから、般若院が修験寺となったのちに何人かが寄進したものと判断される。『報告書』は1980年（昭和55）に纏められたらしいから、二体の不動明王像のうちの一体はそのちに寄進されたのであろう。⁽²²⁾尤も、『報告書』所掲の一体も寄進年月は不明である

この他、堂内には青面金剛絵図、俱利迦羅不動図、三宝荒神図が各一幅宛所蔵されている。そのうち青面金剛絵図は二幅とも、上に日月を、中央に一鬼をふむ本尊、左右に二童子、下部に四薬叉、三猿や二鶏を画いた、各地でよく見る構図のもので、最近村人の寄進したものだという。後二者は、寄進時期、寄進者ともに不明ながら、少なくとも江戸期の作のようである。そのうち、俱利迦羅不動図は、以前ひでりの折、庚申日の払曉に各戸から1人宛庚申堂前に集り、まず青面金剛に雨を祈り、ついで俱利迦羅不動図を持った区長を先頭にして全員鍬をかついで一番近くにある通称口の滝にいき、全員『般若心経』を誦して雨を祈ったが、その折区長は鍬の先きにその不動図を吊した由である。⁽²³⁾三宝荒神図は、裏面に「建立三宝荒神社、当村氏子繁昌祈所」とある記載から、以前は隣りの荒御霊神社（旧名荒神社）に奉安されていたのを、いつの日か——多分荒御霊神社と改名した折——に移奠されたと思われる。前にふれた石坪広一旧蔵の『庚申縁起』に、「宵の庚申はくりから不動、夜中の庚申者三宝庚申。云云」とあることが、その理由とされたのではなかろうか。

3-Ⅲ 庚申待

庚申信仰は、私の調査したかぎり、例外的な場合を除いて、全国的に講組織の形で行われているのが一般である。例外的な場合とは、庚申さんが町内の守り神視されているために、毎庚申日の夕方から三々五々町内の一角に造られている小祠内に祀ってある庚申塔に参詣する伊勢市河崎町南町、および家ごとに庚申に祀る福井県美浜町安江・麻生・宮代・左柿のみである。⁽²⁴⁾また、青森県南・中津軽郡の一部には、講がなく、全集落民で祀るところがあると報告されているけれども、私が実際調べた範囲では事実にはやや反しているようである。⁽²⁵⁾従って、現在では葛畑のように、全字民が参加して庚申待を行なうことは、全国的にみてまことに珍しいのである。

なお、葛畑では60年に1回廻ってくる庚申年には僧侶が参加し、厨子を開扉して護摩供

養を行ない、後日角塔婆を造立する。その日には、村外からの参詣者もあるという。しかし通常の庚申日は僧侶の参加もなく、厨子も開扉せず、字民のみで勤行をしたのち、深夜まで語りあう。私の参加したのは後者の場合だが、現在としては人々の厚い信仰の反映として注目される。ただ、講組織のように初・終の両庚申に、その折の頭屋——葛畑でいえば当番——に当たった家にはご利益があると伝え、頭屋に当ることを喜ぶ習俗はない。けれども、その両日には、他の庚申日より参加者が多いというから、わずかながらその傾向が認められるといえよう。

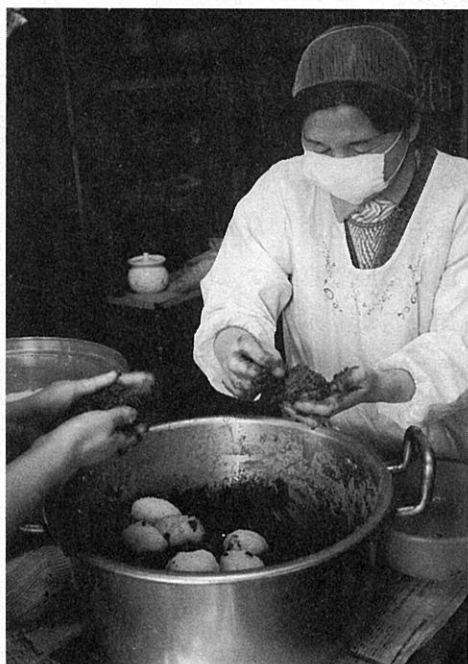
講組織の頭屋は、一般に個人の家が廻り番で勤めるのが原則ながら、まれに寺社や公会堂でやる場合もある。ただし、寺社で行なう場合は大体明治ごろまでしか遡れず、その以前は庚申堂か個人の家であった。従って、葛畑の場合は江戸時代以来の伝統が守られているように見受けられるけれども、残念ながら資料的裏付けがない。頭屋の順は、講中が1地区に偏在するにせよ、集落内に散在するにせよ、広い意味で屋並順が大多数ながら、なかには抽籤もしくは講への加入順の場合もある。これに対して葛畑では、起源時期は不明ながら、夜番すなわち夜廻りの順に従い、字を貫流する川下から1回2戸宛勤めるよう定められている。信仰と生活との密着を示しているといえるのではなかろうか。また、出産その他都合の悪い場合や独居老人などは、親族が代って当番をするが、昨今は病院で出産する関係から適確さに欠けている。出産の折には、以後3庚申遠慮することと定められているが、なかには出嫁した娘の出産にも欠席する人がいる。従って、一部にはいまなお赤不浄すなわち血のけがれを厳密に考えている人々もいることがわかる。

伝承では、葛畑は江戸時代以来60戸内外だったが、昨今の過疎化のために現在では48戸(1992年現在)なので、当番の廻りは以前より早くなり、関係の費用一切も当番持ちなのに、人々から不平めいた言葉は聞かれなかった。場所によっては、講関係の費用一切頭屋もちのために、初・終両庚申以外の頭屋を歓迎しないところもある今日、珍しい。伝統遵守の気持がつよいためであろうか。当番の任務は、庚申堂と籠り堂内外の掃除、冬ならば薪、供物用や人々の喰べるおはぎ、菓子、果物、重箱に入れる煮メや黒豆類、ヘダラと俗称されている榊代用の供花などの準備、勤行後のサービス、および後片付けである。講の当日は、四月半ばとはいえ、場所柄かなり夜は冷えた。そのために、籠り堂の中央の囲炉裏に置かれた達磨ストーヴで燃す薪と石油ストーヴ2個の準備が必要だった。薪は、当番の意志によって、山のかなり奥の場合と手前で取る場合とがあるが、昨今は熊がでるので、あまり奥まではいかなくなった。なかには、前日に準備する人もあるという話だったが、今回は前日に準備がされていた。そして、汚い木はさけ、雑木を選ぶときかされた。

私が庚申堂にいったのは午前9時すぎだったが、本堂の掃除はすでに終り、籠り堂の掃除中だから、かなり早くから始められたのであろう。しかも、仲々丁寧である。薪はす

でに廊下の一隅に数本宛束ねて奇麗に積重ねられていた。手がかかるので、人によっては午後行なうこともあるという。今回は男性1名、女性2名だったが、終ったのは10時半で、それから手別けをして菓子などの必要品を買いにいく一方、料理やおはぎの準備にかかる。準備の様子をみるために、午後2時半前に当番方に行くと、おはぎを作っている最中だったが、みると2人の女性は材料に息のかからないように大きなガーゼのマスクをしていた第三図（おはぎの準備）。従来、そんな格好はみたことがなかったので、人々の敬虔な気持の表われと思って感心した。菓子はすでに購入済みだったので、そのよび方を尋ねると、七色菓子という答が戻ってきた。七色菓子は、前にもふれたが、江戸初期から庚申信仰と七という数字が密接に結びついていたので、それに因んでおそらく17世紀前半ごろから着想された庚申さまに対する供物だったように思われる。『吉田日次記』寛文4年（1664）8月1日庚申日の条の「七種菓子持参」の一句はその一証となろうが、それが葛畑の人々のあいだに伝承されているのには驚いた。尤も葛畑では「七色」ではなく「七種」であったが、その先縦は『吉田日次記』の他に、『用捨箱』、『類聚近世風俗誌』などにも「七種菓子」と記されているから、その例はかなり多い。あるいは、「七色」と「七種」とを同じように考えていたのかもしれない。なお、「七色菓子」は16世紀後半に大黒天にも供えるようになっていた。⁽²⁶⁾

第三図



第四図



おはぎが出来上ると、続いて黒豆を煮、煮メなどの供物や、勤行後の雑談中に一同が喰べる料理作りに取りかかる。それにしても、夕方までにすべての準備を完了しなければならないので、当番は大へん忙しい。私がお籠りの実際をみるために庚申堂にいったのは、午後8時だったが、祭壇には供花、供物が供えられ、ストーブにも火が入っていた上に、すでに2、3の人たちがきていたから、少なくとも7時ごろにはすべての準備が終っていたのであろう。勿論、夕食は済せている。

『報告書』には、有志は奥の瀧で線香を供え、『般若心経』を誦して滝に打たれて身を清め、全員が必ず入浴してから堂にいくと記されているけれども、私の直接きいた範囲では、今回そんなことをした人はいなかった。その上、堂で口や手も漱がなかつたから、全般に潔斎の観念は薄いと考えられる。なお、個人で庚申さんの軸を所持している人たちは、各自の家でおはぎやこんにゃく、山盛りの五目飯を供えて、家内安全を祈ったのち堂に参る。⁽²⁷⁾人々は一応小ざっぱりとした服装で、男性はほとんど洋服である。なお、ところによっては服装がやかましく、上下を必ずつけたところもあれば、庚申袴とよぶ特殊な袴を⁽²⁸⁾はいたところもあったが、くわしくははぶく。

人々は、まず入口に吊してある鰐口を鳴らして拝礼後堂内に入り、入口近くに座っている当番に挨拶したのち、本尊を拜んで席につく。『報告書』には、その折饌米を供えて、氏名、干支、年令を告げるとみえているが、そんな人はひとりもいなかった。席は、2、3の特定の人が暗黙の了解のもとでできた場所に座る以外は自由なのだが、私のみたところでは庚申堂内に女性、籠り堂内に男性が多く席を占めた。ただ、女性が多いために籠り堂の廊下側も女性の席になった。祭壇前には、高杯にのせた七色菓子、おはぎ、酒が並べられていた(第1図参照)。酒は願いの叶った人と当番が各1本宛、願いのある人が3本、計5本である。午後8時15分、男性11名、女性10名なので、きくと、すでに子供2名を含む8名が参って帰ったとのことだったから、全字の各戸から必ず1人が参るというわけではない。午後8時半、総勢26名で勤行が始まった。誦える経や真言は、1980年に庚申年の供養に参加する日隆寺住職が1940年刊の『真言宗日用勤行集』から抜粋した「葛畑庚申待勤行次第」である。従って、それ以前の勤行の内容は不明である。勤行は、音頭取りの老人会長に従い、全員が「勤行次第」を手を持って誦え、約15分で終了した。立拝その他の所作は⁽²⁹⁾ない。

勤行が終って少時してから、当番の手によって供物類が下げられ、順次煮メ、黒豆、漬物、菓子、おはぎなどが配られ、冷酒がつがれて雑談が始まった。堂内はストーブで暖かい。私の近辺の男性たちのあいだでは、遠慮のためか話があまり弾まないが、離れた女性たちの席からはしきりに賑やかな笑い声が挙る。まさに、打解けた懇親の雰囲気である。そこで止むなく質問を始め、3年ほど前にはこの席でオードブルが出る豪勢さになったの

で、庚申さんの好みに合わないとの理由で現在のようにしたこと、25年前におはぎなど面倒だからパンにしようとして提唱した女性が、山火事で焼死したのでその案は中止されたが、庚申さんはそれほどアラタカな神であること、村を守ってくれる神なので、葛畑には火事のないこと、庚申の晩に生まれた子は盗人か知恵遅れになること、庚申アレといって庚申日には3粒でも雨が降ること——事実夕方から一時小雨ふる——、庚申日の3日後の炙はよく効くこと、願うと必ず叶えてくれる神であること、だから山で脚を怪我した人が願ったら大変はやく治ったこと、四方山話をするのを「庚申さんをしよう」ということ、死人は傍においても庚申さんは拝めといわれていること、庚申日には必ずコンニャクを喰べるとされていること、庚申さんは夜明けまでとか、鶏が鳴くまで起きているなどといわれていることなど、葛畑での庚申さんについての伝承や習俗を聞きだした。人々は、酒が入るにつれて、気軽に話をしてくれたが、以上によってわかるように、葛畑でも他府県下で伝えられている伝承や習俗がいまなお伝えられていることがわかった。

午後10時半ごろ、5人の男性がトイレにかこつけて帰り、12時ごろには大部分の人がおはぎを1個宛貰い、当番に礼をいって帰った。そのおはぎは、翌朝家族一同で喰べるといふ。私も、午前2時近くに失礼したが、なお男女各4人が残った。庚申さんにご利益を頂きたい願いがあるためである。翌日、当番の人々は後片付けのために、午前4時ごろまでかかったと聞かされた。なお、いつもの庚申日には、碁を打ち、村歌舞伎の稽古をしたりする人もある由だった。庚申さんのご利益としては、家内安全、安産、耳が聞えるようになること、虫除け、五穀豊饒、治病、不幸よけなどがあげられている。一方、タブーとしては同衾の禁しか伝えられていない。七庚申の重視もない上に、古くから伝わる『庚申縁起』もない。

4. むすび

以上、きわめて粗雑ながら、今回私の知った関宮町葛畑の庚申信仰と庚申待の実体について報告した。用意と注意とが不十分であったために、まことに欠点の多い報告ではあったけれども、一応同地の庚申信仰とくに庚申待についてわかっていただけたと思っている。注目すべき点としては、今日としては組織形体の珍しいこと、人々の生活と信仰とが密着していること、七色菓子、庚申コンニャク、黒不浄（死）を嫌わず、赤不浄（出産や月経）を嫌うこと、庚申風邪、庚申の炙、庚申アレなどの伝承の残存である。ことに、17世紀前半所撰の『尤の草紙』の巻上「をそき物のしなじな」の項にみえる「申まちの夜の鶏の声」など、鶏鳴まで起きていることが伝えられ、実行されているのは、きわめて珍しい。⁽³⁰⁾ こういった習俗や伝承がしだいに消滅していく現在の日本で、ぜひ将来まで伝えてほしいと考える。なお、なにかお気付きの点があったら、ぜひ示教をお願いしたい。(1992.

註

- (1) 以上のややくわしいことについては、拙著『庚申信仰の研究』巻上（1980年、原書房覆刻本）および同『庚申信仰の研究』島嶼篇（1969年、勁草書房刊）によって承知して頂きたい。
- (2) 葛洪『抱朴子』内篇、巻6 微旨篇は、上海版道藏第868冊所収。また、『易内戒』と『赤松子経』とは、安居香山・中村璋八編『緯書集成』に収められてはいないけれども、『河図記命符』は『河図紀命符』と題して、同編『緯書集成』巻6に、『抱朴子』とほぼ同意の文が収められているから、他の2書もおそらく緯書であったと推測される。
- (3) さまざまな三尸駆除法の若干例については、註1同書71頁以下参照。なお、三尸が上天する夜を庚申の日とした理由は、まだ明確にはわかっていない。庚も申も、ともに金の氣に属するためだという説もあるが、それでは何故木や水の氣の日ではいけないのかという説明はされていない。もちろん私にも定見がないので、もしおわかりになっている読者諸賢があったならば、ぜひ示教をお願いしたい。
- (4) ここでは『酉陽雜俎』は、平凡社の東洋文庫本を使用した。その第1冊82頁、および83頁の註2参照。
- (5) 柳宗元の詩文集である『柳河東集輯注』巻18所収。かれは、神は聡明だから、尸虫のいうことなどをわざわざ聞くはずはないとのべているが、かれが敢えて「罵尸虫文」のような一文を草して「尸虫」を罵らなければならなかったのは、三尸説がそれだけ一般の人たちのあいだに普及していたことを物語っているのではなからうか。なお、白居易の『白氏文集』（別名『白氏長慶集』）の巻21、巻23、巻33、巻35などに収められている諸詩にも「尸戸」の文字がみえている。
- (6) 『庚申宝巻』は撰者不明。原本の所持者は沢田瑞穂（元早大教授）。その全文は註1同書96頁以下に掲げておいたので、参照されたい。
- (7) たとえば、『江吏部集』巻上には「庚申を守って延齡の術を廃さず」、同書下巻には「老子の玄訓を続伝し、夜洩に三尸を守る」などとみえている。くわしくは註1同書544頁以下参照。
- (8) 源俊房の日記の『水左記』永保元年（1081）2月3日の条による。なお、拙著『庚申信仰の研究』（下）（1980年、原書房覆刻本）47頁以下参照。
- (9) 藤原頼長の日記の『台記』天養2年（久永元年、1145）1月14日の条以下久寿2年（1155）までの各庚申日の条による。なお、前註同書55頁～59頁参照。
- (10) 庚申懇話会編『日本石仏事典』（1975、雄山閣刊）192頁による。
- (11) 『庚申因縁記』の冒頭に「庚申因縁。辛丑年ヨリ明応五年（1496）丙辛年迄。七百九十五年也」とある一段による。なお、『庚申因縁記』の全文は、註1同書781頁以下参照。撰者は不明。
- (12) 註10同書同頁参照。なお、「庚申講」の称呼は、『諸寺縁起集』の「興福寺別当坊勤行事」の項

が初出。註1 同書161頁参照。

- (13) 現在、私の知る範囲内における庚申信仰の南限は、奄美地方の徳之島である。なお、北海道に伝わったのは、幕末から明治初期にかけて、内地の人々の移住した結果による。
- (14) 小宮豊隆『夏目漱石』1（岩波新書）の3「出生」の項による。そこには、かれはそのため、幼時里子に出されたとも記されている。
- (15) 註1 同書417頁による。なお、現在伝えられている禁忌と習俗については、同書387頁～421頁参照。
- (16) 以上、江戸時代における庚申信仰の諸相についての詳細は、註1 同書596頁～634頁によって承知していただきたい。
- (17) 「葛畑の庚申調査報告書」は「報告書」とはいいいながら、自分で調べたことの他に、他の史書や日野西教授の意見書まで雑然と集めた内容であって、いわゆる正式の体裁を備えた『報告書』ではなく、いわば自分用のメモを一書に合せたにすぎない性質のものである。もちろん、正式に出版されたものではなく、コピーや印刷物の別刷などを集めたものである。ただ、同地の庚申信仰の概要を知るには極めて重宝な内容である。以下、単に「報告書」と略称して引用する。
- (18) たとえば、『お湯殿の上の日記』や、『言経卿記』、『言緒卿記』などの日記類の、慶長5年（1600）以降の記述を参照。その原文は註8 所掲拙著282頁以下に掲げてある。
- (19) 註1 同書876頁所収。
- (20) くくり猿を供える習俗については、註1 同書413以下参照。
- (21) 『陀羅尼集経』は『大正新修大蔵経』第18巻所収。
- (22) 『報告書』は正式の出版物ではないので、刊行年月は記されていない。けれども、昭和55年10月11日付けの「読売新聞」の「但馬丹波版」に、出版した旨が見えているから、その年とした。
- (23) 以上の雨乞いについては『報告書』の第11項「葛畑庚申雨乞いの滝」によった。1回で雨が降らなかったときには、つぎの中の滝、さらに奥の滝にいった祈ったという。
- (24) ただし、美浜町の場合は近年すっかり衰え、中絶している家が多い。
- (25) 註1 同書166頁以下参照。
- (26) 「七色菓子」については、註1 同書275頁～280頁参照。
- (27) 山盛りの五目飯を供えるのは、庚申さんが多くの子をもっているからと、説明した人がいた。
- (28) 服装については、註1 同書419頁以下参照。
- (29) 私のみた勤行は、『報告書』の記載とかなり違う。その理由についてはわからない。
- (30) なお、『言経卿記』慶長7年（1602）4月27日の條に「方違了。鶏鳴之マネシテ帰了」とある1段も、その例となろう。

Koshin Belief in Kazurahata, Sekimiya-cho, Hyogo Prefecture

Tokuchu Kubo

Already in the latter half of the 10th century a temple of the Shingon sect (Fukusho-ji) was established in Kazurahata, and after the Tensho Disturbance in the latter part of the 16th century this became a Shugendo temple. Within the temple precincts there was a hall dedicated to Koshin, and notwithstanding the abolition of the temple in 1895 the Koshin Hall remains to this day as an object of the fervent belief of the people. In his "Research Report on the Koshin Belief in Kazurahata" (1988), Osamu Nishimura states that the Koshin Hall was built in 1719. However, considering the fact that Koshin belief can be seen widely among the court nobles, and also the connection between Shugendo and Koshin belief, the author believes that the Koshin Hall was built at the same time that Fukusho-ji was converted to a Shugendo temple.

Koshin belief and the festival of Kazurahata display various special characteristics and overflow with valuable legends. In particular, the fact that they exhibit an unusual organizational structure, the fact that the daily life of the people and their beliefs are closely connected, the custom of seven-colored cakes and koshin konyaku, taboos concerning childbirth and menstruation, the legend of the Koshin cold, and the survival of the all-night vigil connected with the festival can all be pointed out as extremely unusual special characteristics.